

## 対人関係における同調行動と親の期待に添う行動との関連

—親（主な養育者）に対する自己アピールと主従的關係の影響について—

キーワード：同調行動 親子関係 親的自意識 主従的關係

### I. 問題・目的

同調行動とは誰もが少なからず体験したことや、目撃したことのある行動である。藤原（2006）は同調行動を「自分とは異なる意見・態度・行動・を周囲から求められたとき、迷いながらも周りの意見・態度・行動に合わせてしまうメカニズム」と定義している。同調行動は青年自身が友人関係を維持するために、友人が取っている関係の取り方に過剰適応的に合わせようとしている可能性（岡田，1999）が示唆され、不安状態がその人のパーソナリティである特性不安によって高められている場合、その人は不安の軽減を求め、日常生活では友人関係の中で常に、または頻繁にみられる行動（葛西・松本，2010）であると述べられている。葛西・松本（2010）は青年において自分が我慢しても他人と同じであることを重要視しており、さらに、他人と同じであることに安心感を覚えているのではないかと述べている。なぜ、自分が我慢しても友人と同じであることに安心感を覚え、同じでないと不安になるのだろうか。そこには親子関係が密に関係しているのではないかと考えた。親子関係は生まれて初めて体験する対人関係であり、この親子関係は後の対人関係の基盤となっていると推測されるからである。しかし、同調行動に関する研究は友人関係や対人恐怖性、適応感といった研究は行われているが、親子関係についての研究はほとんどない。対人関係に関する問題において親子関係を無視できるのだろうか。そこで、本研究では同調行動と親子関係との関連について検討することを目的とする。

### II. 仮説

人間関係の最初であり基盤であるのは親子関係である。したがって、同調行動を行ってしまうひとつの要因として、今までの親子関係が影響している可能性が考えられる。そこで、わたしたちは以下の3つ仮説を立てた。

#### 仮説 1

親にどう思われているのかを気にし、親に受け入れてもらえるように振る舞ってきた子どもは、対人関係においても、いかに相手に受け入れてもらえるかを考え、相手の行動、思考に同調することによって、受け入れてもらいやすくしているため、下位尺度の親的自意識の得点が高いと同調行動も起こりやすくなる（同調行動得点も高くなる）。

## 仮説 2

親に干渉されずにきた子どもは、親の気を引く行動の頻度が増加するため、対人関係においても、相手の行動・思考に同調することで気を引き、周りから気を引く行動の頻度が増加すると推測される。したがって、下位尺度の自己アピール得点が高いと同調行動も起こりやすくなる（同調行動得点も高くなる）。

## 仮説 3

親に過度に期待され、その期待に沿って生きてきた子どもは、親の顔色をうかがい、親の決めたことをそのまま自分の意見にしてきた。そのような子どもは、対人関係においても、自分の意見を抑え、人の意見に同調し自分の意見にするため、下位尺度の主従的關係の得点が高いと同調行動も起こりやすくなる（同調行動得点も高くなる）。

## Ⅲ. 方法

### (1) 調査材料

#### ① 親（主な養育者）の期待に添う尺度

女子大生 7 名の自由記述を元に、新たに「親（主な養育者）の期待に添う」尺度を作成した。下位尺度は「親的自意識」「自己アピール」「主従的關係」の 3 つを想定し、計 34 項目の「親（主な養育者）の期待に添う尺度」を構成した。各項目に対し、1=「あてはまらない」2=「ややあてはまらない」3=「どちらともいえない」4=「ややあてはまる」5=「あてはまる」の 5 段階で評定を行ってもらった。各項目内容は表 1 を参照。

表 1. 親（主な養育者）の期待に添う尺度の質問項目

項目	項目内容
	[親的自意識]
1	自分が親（主な養育者）にどう思われているのか気になる
2	世間体など気にならない *
3	親（主な養育者）に会うとき、どんなふうにするまえばいいのか気になる
4	自分の発言を親（主な養育者）がどう受け取ったか気になる
5	親（主な養育者）にみられていると、ついかっこうをつけてしまう
6	自分の容姿を気にするほうだ
7	自分についてのうわさに関心がある
8	親（主な養育者）の前で何かをするとき、自分のしぐさや姿が気になる
9	親（主な養育者）からの評価を考えながら行動する
10	初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気づかう
11	親（主な養育者）の目に映る自分の姿に気を配る
	[自己アピール]
12	私が注目されていないと、つい親（主な養育者）の気を引きたくなる
13	私はいつでも親（主な養育者）の中心にいないと気に入らない
14	私は親（主な養育者）に愛されている
15	親（主な養育者）に褒められるために頑張っている
16	私は親（主な養育者）と調子よくいっている *

- 17 親（主な養育者）を頼ることができない
- 18 私は親（主な養育者）のなかで欠くことのできない存在である \*
- 19 親（主な養育者）は私の考えをわかってくれる \*
- 20 私には、親密感の持てる親（主な養育者）がいる \*
- 21 親（主な養育者）から孤立している
- 22 私と親（主な養育者）のつながりはうわべだけのものである
- 23 親（主な養育者）は私を本当に理解してくれる \*
- 24 親（主な養育者）は頼りにできる  
[主従的關係]
- 25 親（主な養育者）に逆らうことができる
- 26 親（主な養育者）に自分の意見が言える
- 27 親（主な養育者）に嫌われたくない
- 28 親（主な養育者）に見放されることに不安がない \*
- 29 自分の意見はあるが、親（主な養育者）に合わせてしまう
- 30 自分は親（主な養育者）の言いなりな気がする
- 31 親（主な養育者）の顔色を伺う
- 32 親（主な養育者）の言いなりになるのは平気である
- 33 親（主な養育者）と異なることをしていても平気である
- 34 親（主な養育者）と意見の食い違った場合、くい下がってしまう

\* 逆転項目

## ②同調志向尺度（横田・中西，2010）

同時に同調志向尺度（横田・中西，2010）を用い、「親（主な養育者）の期待に添う尺度」との関連性について調査した。各項目に対し、1=「あてはまらない」2=「ややあてはまらない」3=「どちらともいえない」4=「ややあてはまる」5=「あてはまる」の5段階で評定を行ってもらった。各項目内容は表2を参照。

表2. 同調志向尺度（横田・中西，2010）の質問項目

項目	項目内容
1	場を乱さないように、いろいろと人に合わせてしまうことが多い
2	たとえ納得できなくても、しかたなく周りにあわせてしまうことが多い
3	自分の主張を押し通して場を乱すくらいなら、何も言わない方が楽である
4	周囲の反応が気になってしまって、本心と違うことでも、周りの人に合わせて同意してしまうことがよくある
5	私はグループの基準に従いがちである
6	みんなの中でなかなか自分が出せないと思うことがある
7	自分の考えよりも、他者の判断の方が気になってしまう
8	私は、たとえそれが自分の信じていないことであってもグループに賛成する
9	仲間の中で、自分だけ意見が違うと気まずい
10	しばしば、自分の判断の正しさに確信が持てなくなり、周囲の意見を参考にすることがある
11	周りの考えがどうであろうと、自分の考えを押し通すほうだ
12	友人と一緒に何かするときには、たいてい友人のほうが物事を決める
13	誰かの意見に非常に説得力があるなら、私は自分の意見をかえて、その人と協力する
14	外食に行くときには、情報誌や口コミを参考にする
15	自分の意見が他者と一致すると、とても安心する
16	見る映画を決めるときには、すでにその映画を見た人の評判を参考にする
17	授業を履修する際には、その授業の内容などの情報を他の人々から得て決める
18	グループに従うくらいなら、むしろ独立した方がよい

## (2) 調査対象者および調査日時

愛知県内の私立大学に通う女子大学生 105 名（平均年齢 18.66 歳、SD=1.07）を対象に質問紙調査を行った。112 名に配布したが有効回答率 93.75%、有効回答数 105 名であった。調査は 2014 年 5 月 27 日に行った。

## (3) 手続き

各尺度からなる質問紙を「心理学」を受講している女子大学生を対象に、講義時間中に配布し、回収した。集団法にて実施した。

## IV. 結果

### (1) 親の期待に添う尺度の分析

親の期待に添う尺度、34 項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は 7.715、5.413、1.824、1.699、1.479…というものであり、3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 3 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった 3 項目を分析から除外し、再度主因子法 Promax 回転による因子分析を行った。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表 3 に示す。なお、回転前の 3 因子で 31 項目の全分散を説明する割合は 43.976%であった。第 1 因子は 15 項目で構成されており、「私は親（主な養育者）に愛されている」「親（主な養育者）は私を本当に理解してくれている」など、親への信頼に関する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「親への信頼度」因子と命名した。

第 2 因子は 13 項目で構成されており、「親（主な養育者）の目に映る自分の姿に気を配る」「親（主な養育者）からの評価を考えながら行動する」など、親のことを気にしながら行動するような内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「親への主従」因子と命名した。

第 3 因子は 3 項目で構成されており、「初対面の人に、自分の印象を悪くしないように」など周囲のことを気にしないような内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「親（主な養育者）を気にする」因子と命名した。

また、内的整合性を検討するために各下位尺度の  $\alpha$  係数を算出したところ、「親への信頼度」で  $\alpha=0.731$ 、「親への主従」で  $\alpha=0.829$  と十分な値が得られた。「自己主張」では  $\alpha=0.480$  と十分な値は得られなかった。

表3. 親(主な養育者)の期待に添う尺度の因子分析結果(promax回転後の因子パターン)

項目内容		I	II	III
親への信頼度因子 15項目 $\alpha = .731$	私は親(主な養育者)に愛されている。	-.792	.224	-.033
	親(主な養育者)は私を本当に理解してくれる。	.747	-.254	-.053
	親(主な養育者)は私の考えをわかってくれる。	.738	-.330	-.011
	私には、親密感の持てる親(主な養育者)がいる。	.721	-.311	.081
	私は、親(主な養育者)と調子よくいっている。	.719	-.408	-.073
	親(主な養育者)を頼ることができない。	.691	-.064	-.101
	親(主な養育者)に自分の意見が言える。	-.683	.008	-.217
	親(主な養育者)は頼りにできる。	.682	-.388	-.121
	私と親(主な養育者)のつながりはうわべだけのもの である	.648	-.244	.094
	親(主な養育者)から孤立している。	.637	-.080	-.073
	自分は親(主な養育者)の言いなりな気がする。	.636	.229	.334
	私は、親(主な養育者)の中で欠くことのできない存在 である。	.625	-.366	.050
	親(主な養育者)に会うとき、どんなふうにするまえば 良いのか気になる。	.590	.410	-.308
	親(主な養育者)の顔色をうかがう。	.550	.309	-.016
	親(主な養育者)に逆らうことができる。	-.467	-.279	-.323
親への主従因子 13項目 $\alpha = .829$	親(主な養育者)に嫌われたくない。	-.271	.725	.058
	親(主な養育者)に褒められるために頑張っている。	.024	.665	-.230
	私はいつでも親(主な養育者)の中心にいないと気に入ら ない。	.082	.556	-.255
	自分の発言を親(主な養育者)がどう受け取ったか気にな る。	.052	.548	-.098
	親(主な養育者)の目に映る自分の姿に気を配る。	.409	.548	.031
	自分が親(主な養育者)にどう思われているのか気にな る。	.358	.534	-.068
	私が注目されていないと、つい親(主な養育者)の気を 引きたくなる。	-.053	.528	-.206
	親(主な養育者)からの評価を考えながら行動する。	.406	.527	-.238
	親(主な養育者)に見られていると、ついかっこうをつ けてしまう。	.342	.512	-.264
	自分の意見があるが、親(主な養育者)に合わせてしま う。	.319	.511	.374
	親(主な養育者)と意見の食い違った場合、くい下がっ てしまう。	.257	.488	.146
	親(主な養育者)の前で何かをするとき、自分のしぐさ や姿が気になる。	.321	.453	-.075
	親(主な養育者)に見放されることに不安がない。	.104	.364	-.041
自己主張因子 3項目 $\alpha = .480$	初対面の人に、自分の印象を悪くしないように気遣う。	-.048	.223	.620
	親(主な養育者)の言いなりになるのは平気である。	.053	.270	.518
	世間体など気にならない。	-.066	.201	.444

## (2) 親の期待に添う尺度の総得点および下位尺度間の関連

親との関係性尺度の4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「信頼度」下位尺度得点(平均 2.46、SD 0.51)、「親への主従」下位尺度得点(平均 2.59、SD 0.65)、「自己主張」下位尺度得点(平均 3.40、SD 0.73)、「同調行動」下位尺度得点(平均 3.48、SD 0.47)とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出したところ、「信頼度」で $\alpha = .73$ 、「親への主従」で $\alpha = .83$ 、「自己主張」で $\alpha = .48$ であり、「信頼度」と「親への主従」では十分な値が得られたが、「自己主張」では十分な値が得られなかった。

親(主な養育者)との関係性の下位尺度相関を表4に示す。信頼度と自己主張では有意な負の相関がみられたが、そのほかの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

表4. 親の期待にそう尺度の総得点及び下位尺度間の相関と平均, SD,  $\alpha$

	信頼度	服従	自己主張	平均	SD	$\alpha$
信頼度	—	0.08*	0.1*	2.46	.51	.73
親への主従		—	0.20*	2.59	.65	.83
自己主張			—	3.40	.73	.48

\* $p < .05$

(3) 親の期待に添う尺度の下位尺度と同調志向尺度との関連

親の期待に添う尺度の下位尺度と同調志向尺度の相関を求めた(表5)。「親への信頼度」「親への主従」「自己主張」の3つすべてにおいて同調行動との間に弱い正の相関がみられた。

表5. 親の期待に添う尺度の下位尺度と同調志向尺度の相関係数

	親への信頼度	親への主従	自己主張
同調行動	0.25*	0.26*	0.28*

\* $p < .05$

## V. 考察

(1) 親の期待に添う尺度

内的整合性を検討する $\alpha$ 係数は「親への信頼度」因子と「親への主従」因子では十分な値が得られた。しかし、「自己主張」因子については、十分な値は得られなかった。これは、項目数が少ないことが影響していると考えられる。

(2) 親の期待に添う尺度と同調行動との関連性

仮説1「親にどう思われているのかを気にし、親に受け入れてもらえるように振る舞ってきた子どもは、対人関係においても、いかに相手に受け入れてもらえるかを考え、相手の行動、思考に同調することによって、受け入れてもらいやすくしているため、下位尺度の親的自意識が高いと同調行動も高くなる。」は、両側5%水準で弱い相関ではあるが支持された。

仮説2「親に干渉されずにきた子どもは、親の気を引く行動の頻度が増加するため、対人関係においても、相手の行動・思考に同調することで気を引き、周りから気を引く行動の頻度が増加すると推測される。したがって、下位尺度の自己アピール得点が高いと同調行動も起こりやすくなる(同調行動得点も高くなる)。」は、両側5%水準で弱い相関ではあるが支持された。

仮説3「親に過度に期待され、その期待に添って生きてきた子どもは、親の顔色をうかがい、親の決めたことをそのまま自分の意見にしてきた。そのような子どもは、対人関係においても、自分の意見を抑え、人の意見に同調し自分の意見にするため、下位尺度の主従

的が高いと同調行動も高くなる。」は、両側 5%水準で弱い相関であったが支持された。しかし、下位因子である「気にする」の項目数が 3 つしか抽出できなかった点で検討が求められた。

親の期待に添う尺度と同調行動尺度との間に弱い相関しか見られなかったのは、今回の研究では大学生を対象にしたことが挙げられる。大学生の同調行動において、親子関係の影響というよりは、対人場面（特に友人関係）の関係の中で生じるのではないかと考えられる。松田(2007)によると、青年期は集団の重要性が増し、集団の影響力からの影響が大きくなる時期であり、集団の規範に従おうとする傾向や、周囲の人々の行動や態度に注意を払い、自分の行動や態度と比較しようとする傾向が顕著になるとある。よって現代の大学生は比較的と同調行動をしている人が多く、親の期待に添う子どもだけではなく、親の期待には添ってこなかった子どもも同調行動を行うため、強い相関は見られなかったのではないかと予想される。親の期待に沿う尺度と同調尺度に弱い相関がみられるということは、親子関係と同調行動は関連があると考えられる。しかし、関連が弱いことから、親子関係中での別の視点で関連しているのではないかと推定される。今後の課題として、別の観点から親子関係との関連を検討することが求められた。

## 引用文献

- 藤原正光 2006 同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み(1)―大学生による小5時代の回想から―『教育学部紀要』 文教大学教育学部, 40, 1-9
- 黒沢香 1999 多数派への同調に対する自己意識と自尊心の影響 心理學  
究, 63(6), 379-387
- 松田常美 2007 青年期における理想の友人関係と対人不安感情が現実の友人関係に及ぼす影響 甲南女子大学大学院論集. 人間科学研究編, 6, 49-65
- 松本麻里・葛西真記 2010 青年期の友人関係における同調行動―同調行動尺度の作成―  
鳴門生徒指導研究, 19, 81-93
- 岡崎努 1999 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学  
研究, 47, 432-439
- 田崎敏昭 1974 同調者・逸脱者に対する知覚反応 実験社会心理学研究, 14, 69-77
- 横田晋大・中西大輔 2010 同調志向尺度の作成―規範的影響と情緒的影響― 広島修大  
論集 51(2), 23-36, 2011-02-28

